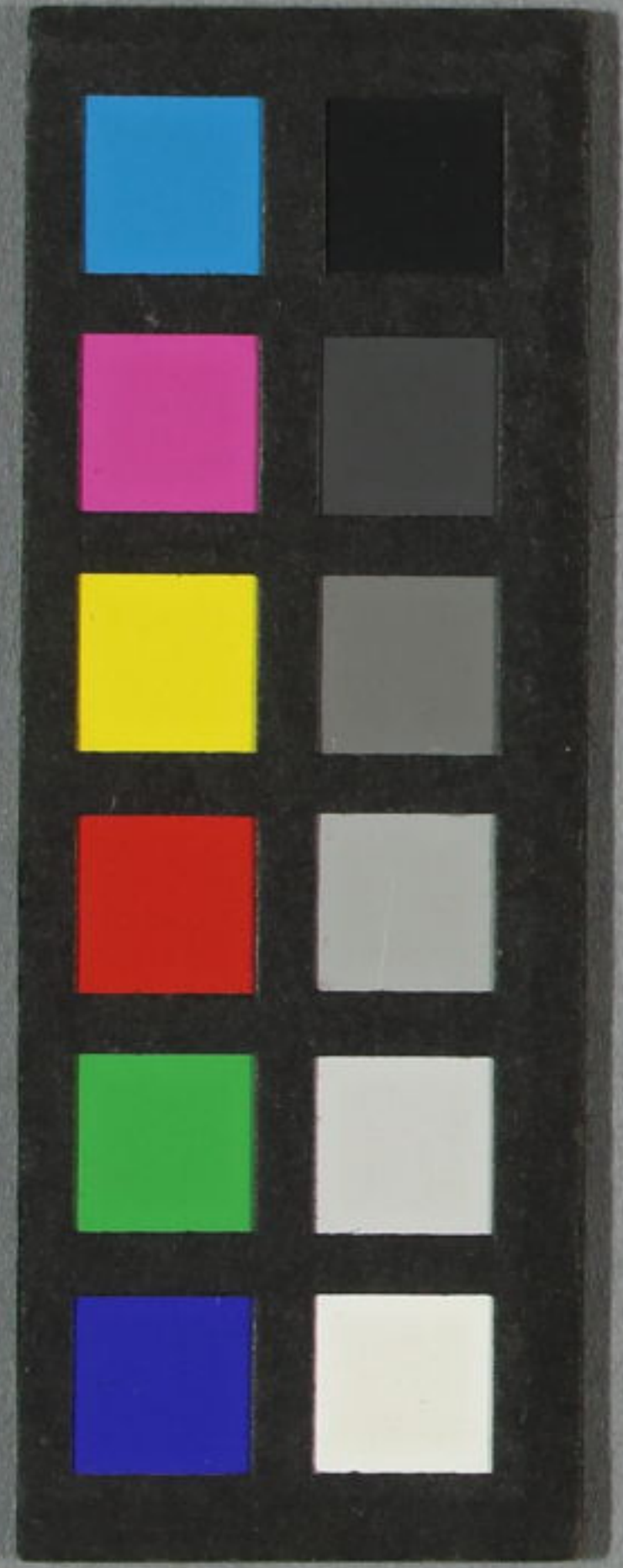


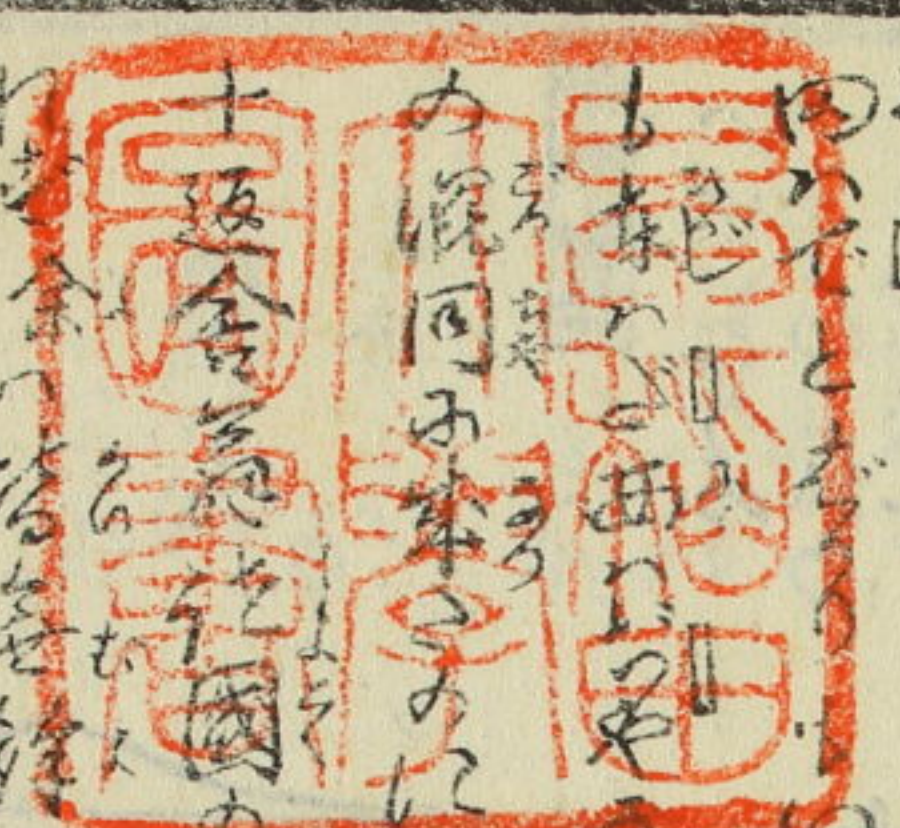
增補  
東海道膝栗毛  
三編

~ 13  
3791  
2



門 へ 13  
號 3791  
卷 2

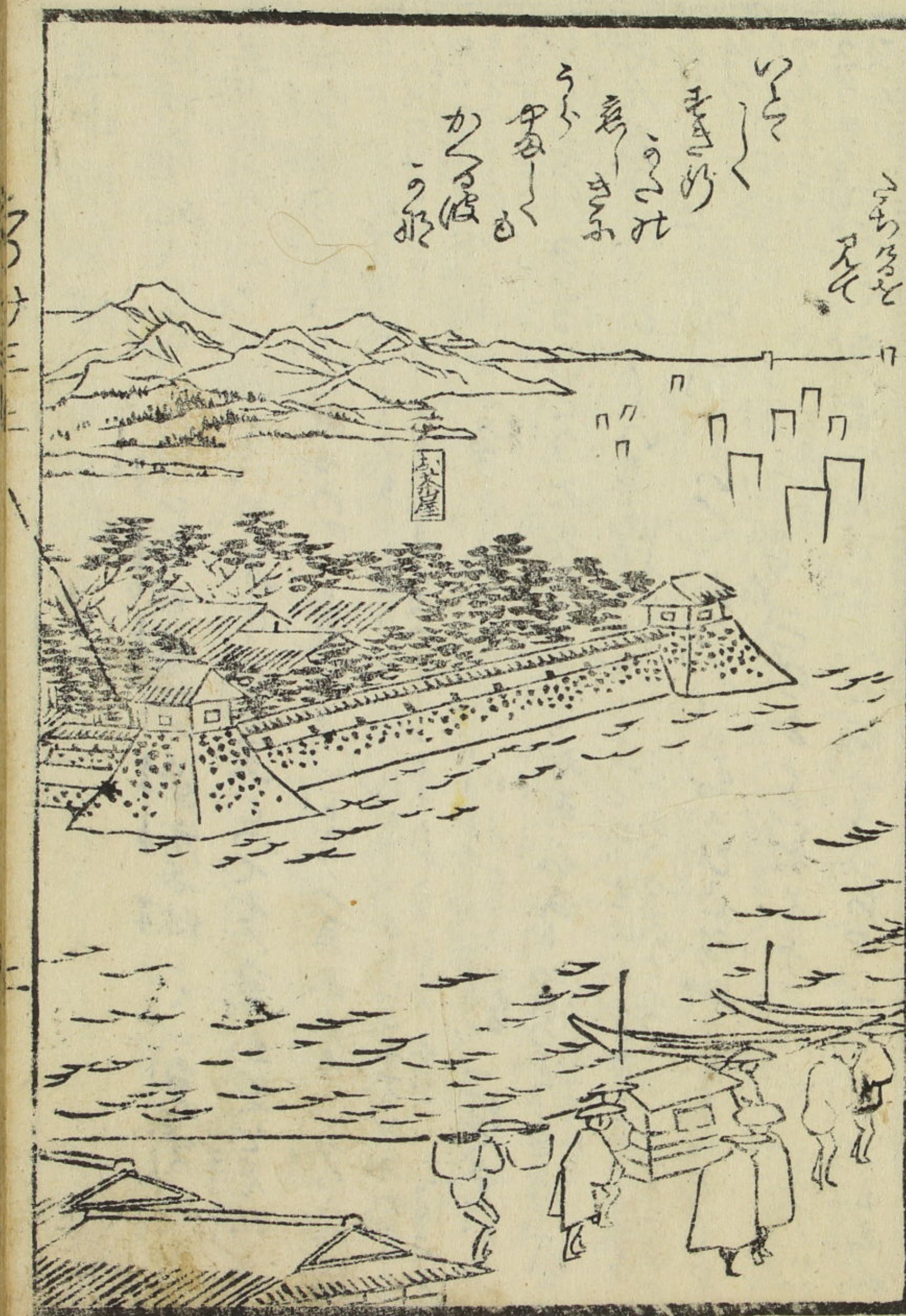
雅言べせといふ事所を東國よそだといふ西國よそいふ事と云  
只危物名古語熟田の意なりたりとちやとつらひ事といふ熟  
田といふ事なりたれども東國よそだといふ事と云  
上巻の語に精しといふも微細の事なり是れ漢語ともいふ  
上巻の語に精しといふも微細の事なり是れ漢語ともいふ  
彼をたつと云ふは其の語を訂しつは原典に云ふ事なり是れ色  
つらふと云ふは其の語を訂しつは原典に云ふ事なり是れ色



物より人為

明治二二五年

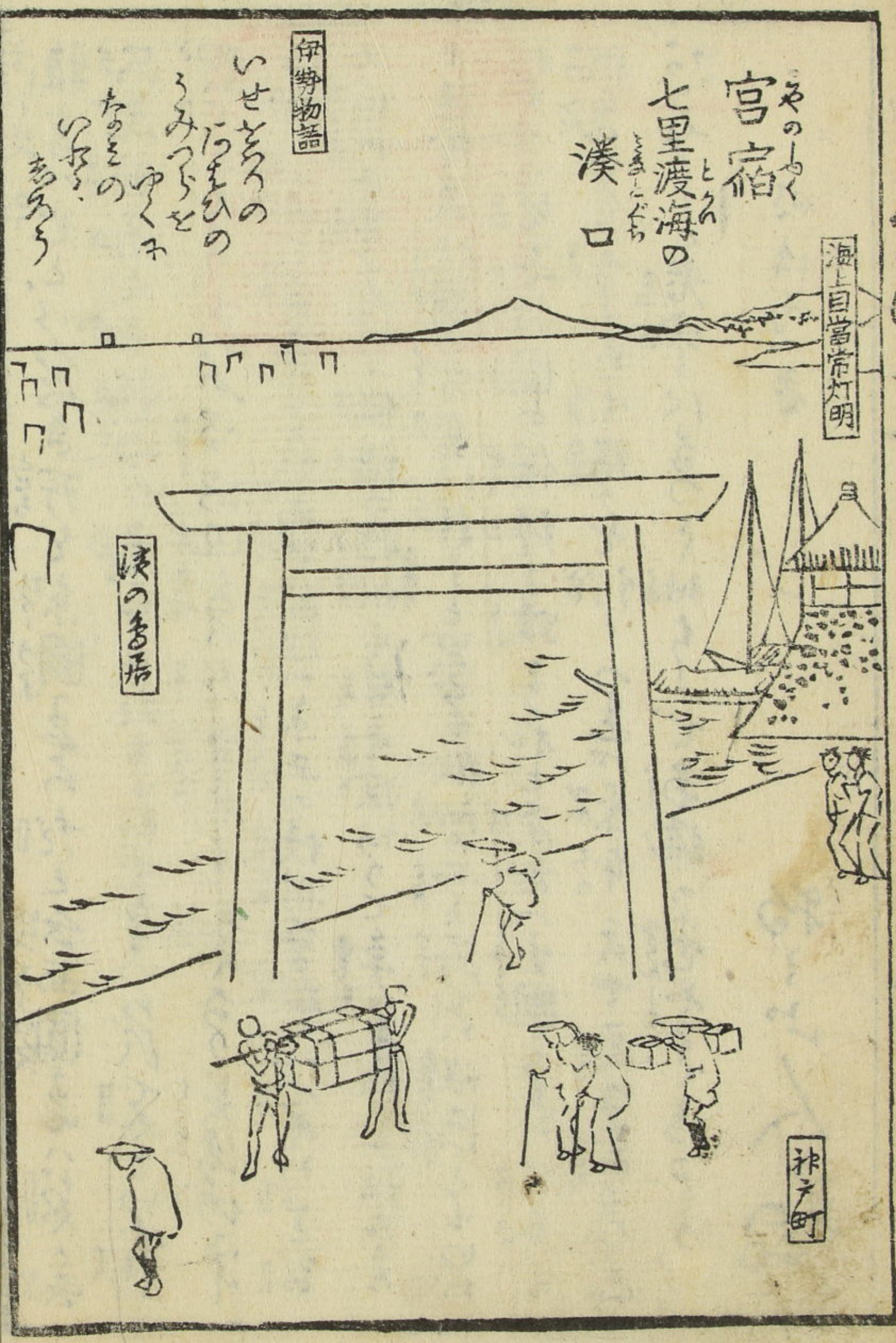
カノナ三二



いよ  
まきめ  
うさぎ  
かきく  
うさぎ

式部

三十三



宮宿  
七里渡海の  
漢口

海上目富常灯明

伊勢物語

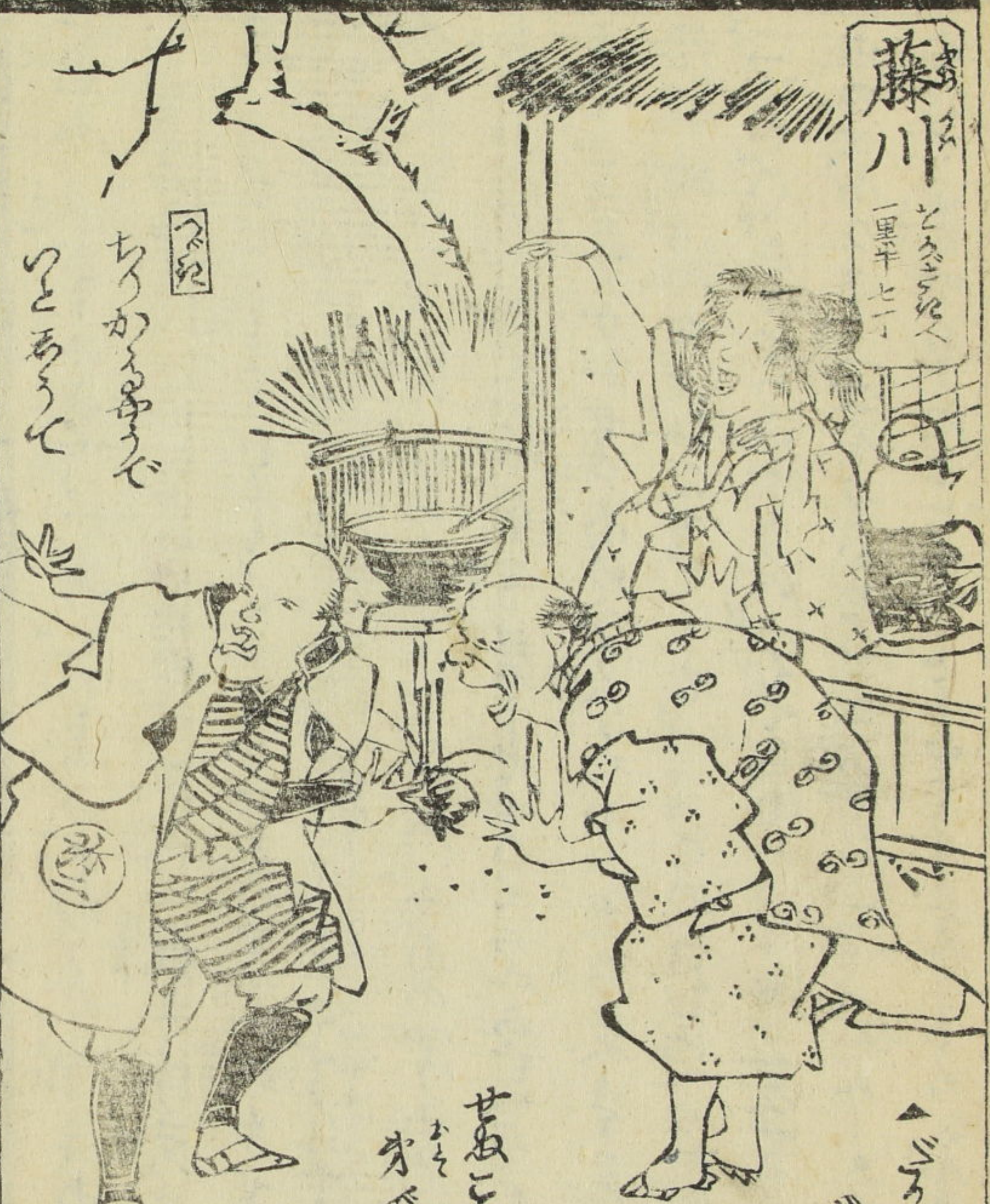
いせ物語の  
うみつらと  
たのその  
いせ

漢の香居

林町



藤川  
一里半七二



つら  
ちんかえりやうぞ  
つとあうて

▲ごうら女をうらと  
びんくーて  
あんふれを  
のらめやア  
理がまことや  
廿五のつめりりか  
才でイヤモ  
困果まことア  
せん  
ハア

ねらねら  
ヤッ  
女房どきう  
イヤ総女房  
ぢやあく  
のあいらん  
さんるあろ  
ふのみヤンヤア  
あきこらじろ  
あのとあうそのを  
ののつとで色狂れさ



こまさんダ  
さうのえろ  
せるとにしも  
かすいこんご  
ひらのの娘  
この中をいせ  
ローハ  
かつこま  
くが  
廿五  
せん  
ハア

ふる麻中らうめあふとけらくくくくの時よかやせんおやま  
ーうごさうやー 一葉もものんごさうさ 一かうめくや  
せうさアきりぐんもやとれト孫ううがちやううやせやうくと  
まひとまゆこのとまうとのがれいを北八

くまらる 婿ハハんのまむひふとあやまゆひとあやし目あひ  
一あめくもえんごりののどちぢぐんをつらまてごうあうとあめく  
のどあさうーの男ご 一田目もねん波方さあはじごさきまを  
まらぐくとあやアあめく一生の出まご 一ゆもあめくれは  
あうてまごまが北八があの娘ととてあやつたうるとかあや  
えつけ後とまは世あめ人の肉とごううほふ牛とやア  
かつて娘とあやまうさうとあせうや赤娘のごといへてま

もまけぬ 字あありあんご嘴とえんがらかーて北の谷 養の  
やうごとあやうすとあやあへまおれがあやうやアうぬハ八  
さぬの地ごとととあやせうーいわれがあや八まんさぬの地ごと  
ゆとあやあかハテまぬハきらぐんの豆とらうとーごあや  
ねく 一市谷の豆との地はぐあまねるせ。かて大平門のり  
あひ生ある芽の青丸小糖まぬあひひける大平の川  
かくて足跡の城下ゆのう泡書の名小休とあおの湯豆着  
ひて一盤をドめておるこ 一きく小ませがたぬひとあ  
あやとまうまかろりまうまのさうのさうのり大さう  
あやののこまあうとまのあやうまのさう  
これてのぬのあふあむれホ 一これくあまあま  
まのの 一三兵衛の七六日あるへ 一これあれがひらつてやアア



らちきうせと北八

標干ヒラと云ふ名はヤチカ矢作川チにさる標小及のゆきぬ

それより字取坂尾崎大演義カキの立場カキゆきるといふ名は

名あるれどなるよりまがさうなとて録カキする所は付カキす

ゆきと云ふことカキ「ゆきと云ふことゆきと云ふことゆきと云ふこと

「それと云ふことカキ「それと云ふことゆきと云ふことゆきと云ふこと

徳とせとれと云ふことゆきと云ふことゆきと云ふことゆきと云ふこと

ゆきと云ふことゆきと云ふことゆきと云ふことゆきと云ふこと

ゆきと云ふことゆきと云ふことゆきと云ふことゆきと云ふこと

ゆきと云ふことゆきと云ふことゆきと云ふことゆきと云ふこと

ゆきと云ふことゆきと云ふことゆきと云ふことゆきと云ふこと

八指のゆきと云ふことゆきと云ふことゆきと云ふことゆきと云ふこと

八指の古ゆきと云ふことゆきと云ふことゆきと云ふことゆきと云ふこと

ゆきと云ふことゆきと云ふことゆきと云ふことゆきと云ふこと

ゆきと云ふことゆきと云ふことゆきと云ふことゆきと云ふこと

ゆきと云ふことゆきと云ふことゆきと云ふことゆきと云ふこと

ゆきと云ふことゆきと云ふことゆきと云ふことゆきと云ふこと

ゆきと云ふことゆきと云ふことゆきと云ふことゆきと云ふこと

ゆきと云ふことゆきと云ふことゆきと云ふことゆきと云ふこと

ゆきと云ふことゆきと云ふことゆきと云ふことゆきと云ふこと



某辰ハ鼻法ガあつて宝室ニ「もあ辰のねんさうのふごらふ  
 ありのさ」<sup>北八</sup>「何ホーうやありののさ」<sup>つりてあきまうてを</sup>イヤらのさうゆふ  
 びつごらへうつくハ大きくてころちんハあひさやうごらアハえ  
 づ小あぢぢア大きな方ダヤすいあひさいもうハさあおふナント由  
 亭主<sup>うらな</sup>所方<sup>ところ</sup>の大きな方を九又小買やせうううごらうを七又小  
 まけてらんませ「アイほうおまをかめーおされ」<sup>北二</sup>「あひさん法がうらま  
 一七く買ふとあひつごら所こ七又小買やせうううごらうのさ  
 の方ちかり買やせう」<sup>北八</sup>「いんハ大差いごあひさやうがまぬせ  
 あらうとあひつごら解あひつごらさうやをわくくが何ふあるのさ  
 「あさやうでおます一葉かめーあさうませぶうもあつてごらうそ  
 とられませんりいさ」<sup>北二</sup>「此方ハうらねあうさすぶ田舎ごらりのさ



池鯉射

不自由<sup>北</sup>と云  
 江戸ごらうてさ  
 ぎうやせうてく  
 美りのがある  
 めんごらえんさ  
 とねあさうまを  
 こまぢやと一葉<sup>や</sup>  
 七又めくあは  
 ませうりいな  
 江戸の落<sup>おち</sup>が  
 ちるねののさ























新編三才

さういふつらうふ十のかごはなせれを義知う 一子七んまらる

婦人その母るけりうさかあまのさういふと服小うたれふり

かくてお船川おこととては軍田の立物小体むけりけり

下かち申うとさうりまう 北下さういふとさうりまうとれ女中北下

北ハあまのけりう 北下さういふとさうりまうとれ女中北下

二指ゆてえな 女下ハハハくちむぐりでおわがりまうとれ

集で合やせう 下ヲホと 北下さういふとさうりまうとれ

下ハあまのけりう 北下さういふとさうりまうとれ

そのい江戸ぢやア意味りのらひあきしてゐる様さうさる中

ののいねさういふとさうりまうとれ

庭の若うか高のやるとかひとせらるるがさういふ

さういふとさうりまうとれ

さういふとさうりまうとれ

さういふとさうりまうとれ

さういふとさうりまうとれ

さういふとさうりまうとれ

さういふとさうりまうとれ

さういふとさうりまうとれ

さういふとさうりまうとれ

さういふとさうりまうとれ

さういふとさうりまうとれ

さういふとさうりまうとれ

さういふとさうりまうとれ

さういふとさうりまうとれ

さういふとさうりまうとれ

さういふとさうりまうとれ









































津

松坂  
江戸

中津高  
六角堂  
はるまじ



江戸の町

いふよこの町の

衆人のとある

あつたを伝束

この町を

あつた

あつた

あつた

二宝荒神 富士のうらと小らふのつれてまゐる 江戸の都のあど

とせん 祇園 清きマレ 赤坂山 マアトコナヤ コウヤサ コウヤサ コウヤサ コウヤサ

北の橋 小暮うらまじ 鹿がたれふりのおのせする マアトコナヤ

京都の 鹿がやあまのよろまふ心出あても 祇園 赤坂山 マアトコナヤ

下まんどつらんふのハツタ 下まんどつらんふのハツタ

あつた 下まんどつらんふのハツタ

あつた 下まんどつらんふのハツタ

あつた 下まんどつらんふのハツタ

あつた 下まんどつらんふのハツタ

あつた 下まんどつらんふのハツタ

江戸の町

江戸





二九七

さるまゝく 珍(めづ)りのを 業(わざ)敷(し)りては 二の 了(し)る 表(あら)わさし 小(こ)の 袋(ふくろ) 七(なな) 枚(まい)  
油(あぶら) で 煮(に) つけ けり 又(また) 煮(に) 豆(まめ) の 中(うち) の 小(こ) の 二(に) 七(なな) 枚(まい) 煮(に) つけ けり  
跡(あと) との 二(に) 七(なな) 枚(まい) 煮(に) つけ けり 又(また) 煮(に) 豆(まめ) の 中(うち) の 小(こ) の 二(に) 七(なな) 枚(まい) 煮(に) つけ けり  
府(ふ) 中(ちゆう) の 小(こ) の 二(に) 七(なな) 枚(まい) 煮(に) つけ けり 又(また) 煮(に) 豆(まめ) の 中(うち) の 小(こ) の 二(に) 七(なな) 枚(まい) 煮(に) つけ けり  
まゆ 二(に) 七(なな) 枚(まい) 煮(に) つけ けり 又(また) 煮(に) 豆(まめ) の 中(うち) の 小(こ) の 二(に) 七(なな) 枚(まい) 煮(に) つけ けり  
手(て) は 二(に) 七(なな) 枚(まい) 煮(に) つけ けり 又(また) 煮(に) 豆(まめ) の 中(うち) の 小(こ) の 二(に) 七(なな) 枚(まい) 煮(に) つけ けり  
二(に) 七(なな) 枚(まい) 煮(に) つけ けり 又(また) 煮(に) 豆(まめ) の 中(うち) の 小(こ) の 二(に) 七(なな) 枚(まい) 煮(に) つけ けり  
ま 二(に) 七(なな) 枚(まい) 煮(に) つけ けり 又(また) 煮(に) 豆(まめ) の 中(うち) の 小(こ) の 二(に) 七(なな) 枚(まい) 煮(に) つけ けり  
水(みづ) の 二(に) 七(なな) 枚(まい) 煮(に) つけ けり 又(また) 煮(に) 豆(まめ) の 中(うち) の 小(こ) の 二(に) 七(なな) 枚(まい) 煮(に) つけ けり  
風(かぜ) を 二(に) 七(なな) 枚(まい) 煮(に) つけ けり 又(また) 煮(に) 豆(まめ) の 中(うち) の 小(こ) の 二(に) 七(なな) 枚(まい) 煮(に) つけ けり

五

かど 二(に) 七(なな) 枚(まい) 煮(に) つけ けり 又(また) 煮(に) 豆(まめ) の 中(うち) の 小(こ) の 二(に) 七(なな) 枚(まい) 煮(に) つけ けり  
小(こ) の 二(に) 七(なな) 枚(まい) 煮(に) つけ けり 又(また) 煮(に) 豆(まめ) の 中(うち) の 小(こ) の 二(に) 七(なな) 枚(まい) 煮(に) つけ けり  
二(に) 七(なな) 枚(まい) 煮(に) つけ けり 又(また) 煮(に) 豆(まめ) の 中(うち) の 小(こ) の 二(に) 七(なな) 枚(まい) 煮(に) つけ けり  
二(に) 七(なな) 枚(まい) 煮(に) つけ けり 又(また) 煮(に) 豆(まめ) の 中(うち) の 小(こ) の 二(に) 七(なな) 枚(まい) 煮(に) つけ けり  
二(に) 七(なな) 枚(まい) 煮(に) つけ けり 又(また) 煮(に) 豆(まめ) の 中(うち) の 小(こ) の 二(に) 七(なな) 枚(まい) 煮(に) つけ けり  
二(に) 七(なな) 枚(まい) 煮(に) つけ けり 又(また) 煮(に) 豆(まめ) の 中(うち) の 小(こ) の 二(に) 七(なな) 枚(まい) 煮(に) つけ けり  
二(に) 七(なな) 枚(まい) 煮(に) つけ けり 又(また) 煮(に) 豆(まめ) の 中(うち) の 小(こ) の 二(に) 七(なな) 枚(まい) 煮(に) つけ けり  
二(に) 七(なな) 枚(まい) 煮(に) つけ けり 又(また) 煮(に) 豆(まめ) の 中(うち) の 小(こ) の 二(に) 七(なな) 枚(まい) 煮(に) つけ けり  
二(に) 七(なな) 枚(まい) 煮(に) つけ けり 又(また) 煮(に) 豆(まめ) の 中(うち) の 小(こ) の 二(に) 七(なな) 枚(まい) 煮(に) つけ けり  
二(に) 七(なな) 枚(まい) 煮(に) つけ けり 又(また) 煮(に) 豆(まめ) の 中(うち) の 小(こ) の 二(に) 七(なな) 枚(まい) 煮(に) つけ けり

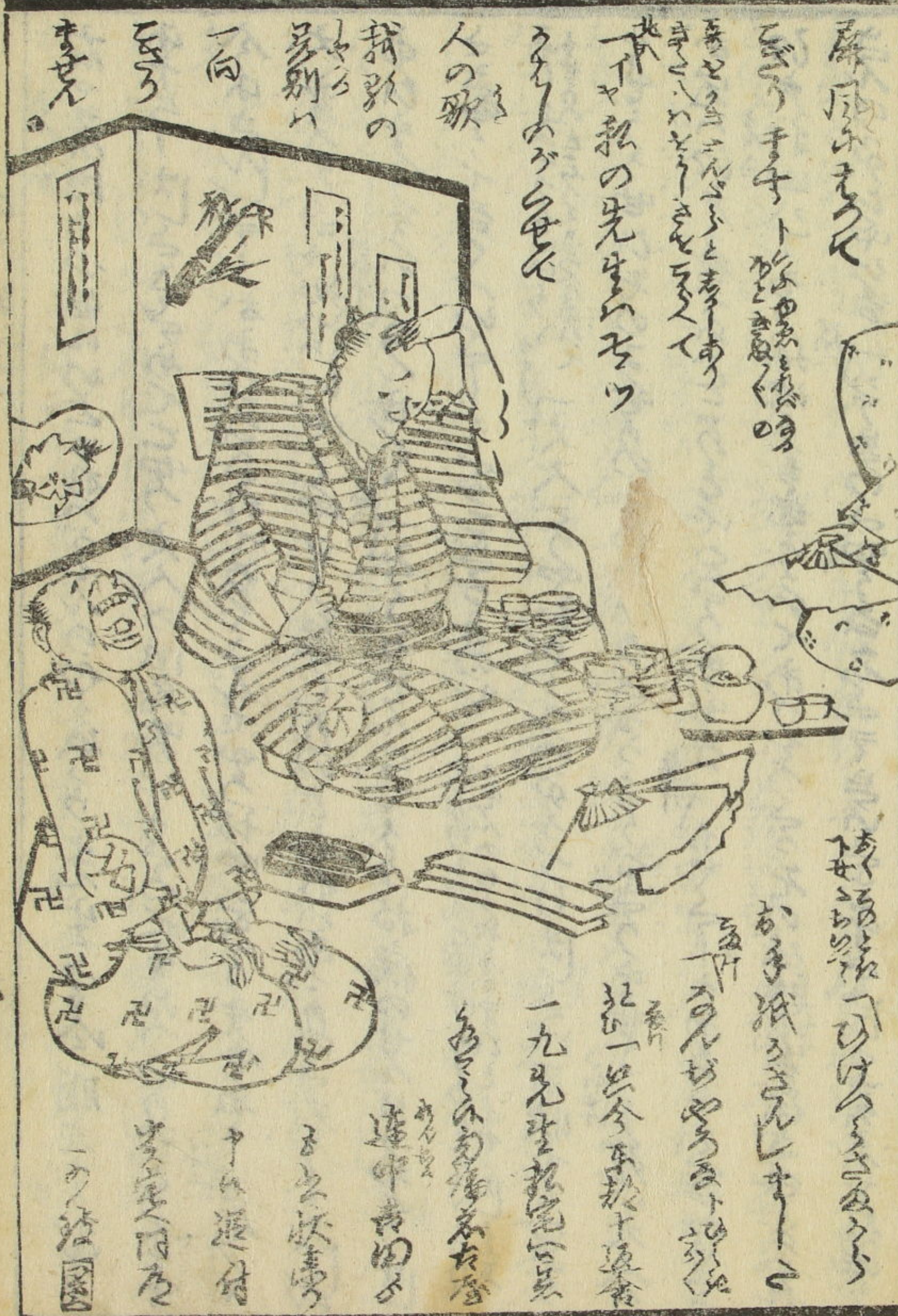
二九八

文部省  
大判別



あつち  
 せん  
 私おはな  
 集一の方の大人  
 のわらわめはうらほ  
 二ねねの  
 あつち  
 のわらわめはうらほ  
 集一の方の大人

こつては次さんイマ先生  
 足道乃中  
 筋七  
 さつち  
 のふ  
 足道乃中  
 筋七  
 さつち  
 のふ



屏風ふもつて  
 こつちま子ト  
 人の歌  
 我歌の  
 足別の  
 一向  
 まる  
 まる

お手紙ささんしす  
 一九先生お完  
 足道乃中  
 筋七  
 さつち  
 のふ

友の葉田中へ直いひとを頼らざるのやうな先生を今朋友をわづ  
 中よりはしきさまめて中より大人の心算をこころてまわつてのこのま  
 今ふまに「ううおあひまされてるさんで中よりやぶるやむぬ」<sup>三</sup>とく  
 大妻をこころ地味にやとやうちやりのとわねばあつたの「うう」<sup>四</sup>に  
 あひまうまひ「うう」<sup>五</sup>とく「うう」<sup>六</sup>とく「うう」<sup>七</sup>とく「うう」<sup>八</sup>とく  
 「うう」<sup>九</sup>とく「うう」<sup>十</sup>とく「うう」<sup>十一</sup>とく「うう」<sup>十二</sup>とく  
 「うう」<sup>十三</sup>とく「うう」<sup>十四</sup>とく「うう」<sup>十五</sup>とく「うう」<sup>十六</sup>とく  
 「うう」<sup>十七</sup>とく「うう」<sup>十八</sup>とく「うう」<sup>十九</sup>とく「うう」<sup>二十</sup>とく  
 「うう」<sup>二十一</sup>とく「うう」<sup>二十二</sup>とく「うう」<sup>二十三</sup>とく「うう」<sup>二十四</sup>とく  
 「うう」<sup>二十五</sup>とく「うう」<sup>二十六</sup>とく「うう」<sup>二十七</sup>とく「うう」<sup>二十八</sup>とく  
 「うう」<sup>二十九</sup>とく「うう」<sup>三十</sup>とく「うう」<sup>三十一</sup>とく「うう」<sup>三十二</sup>とく  
 「うう」<sup>三十三</sup>とく「うう」<sup>三十四</sup>とく「うう」<sup>三十五</sup>とく「うう」<sup>三十六</sup>とく  
 「うう」<sup>三十七</sup>とく「うう」<sup>三十八</sup>とく「うう」<sup>三十九</sup>とく「うう」<sup>四十</sup>とく  
 「うう」<sup>四十一</sup>とく「うう」<sup>四十二</sup>とく「うう」<sup>四十三</sup>とく「うう」<sup>四十四</sup>とく  
 「うう」<sup>四十五</sup>とく「うう」<sup>四十六</sup>とく「うう」<sup>四十七</sup>とく「うう」<sup>四十八</sup>とく  
 「うう」<sup>四十九</sup>とく「うう」<sup>五十</sup>とく「うう」<sup>五十一</sup>とく「うう」<sup>五十二</sup>とく  
 「うう」<sup>五十三</sup>とく「うう」<sup>五十四</sup>とく「うう」<sup>五十五</sup>とく「うう」<sup>五十六</sup>とく  
 「うう」<sup>五十七</sup>とく「うう」<sup>五十八</sup>とく「うう」<sup>五十九</sup>とく「うう」<sup>六十</sup>とく  
 「うう」<sup>六十一</sup>とく「うう」<sup>六十二</sup>とく「うう」<sup>六十三</sup>とく「うう」<sup>六十四</sup>とく  
 「うう」<sup>六十五</sup>とく「うう」<sup>六十六</sup>とく「うう」<sup>六十七</sup>とく「うう」<sup>六十八</sup>とく  
 「うう」<sup>六十九</sup>とく「うう」<sup>七十</sup>とく「うう」<sup>七十一</sup>とく「うう」<sup>七十二</sup>とく  
 「うう」<sup>七十三</sup>とく「うう」<sup>七十四</sup>とく「うう」<sup>七十五</sup>とく「うう」<sup>七十六</sup>とく  
 「うう」<sup>七十七</sup>とく「うう」<sup>七十八</sup>とく「うう」<sup>七十九</sup>とく「うう」<sup>八十</sup>とく  
 「うう」<sup>八十一</sup>とく「うう」<sup>八十二</sup>とく「うう」<sup>八十三</sup>とく「うう」<sup>八十四</sup>とく  
 「うう」<sup>八十五</sup>とく「うう」<sup>八十六</sup>とく「うう」<sup>八十七</sup>とく「うう」<sup>八十八</sup>とく  
 「うう」<sup>八十九</sup>とく「うう」<sup>九十</sup>とく「うう」<sup>九十一</sup>とく「うう」<sup>九十二</sup>とく  
 「うう」<sup>九十三</sup>とく「うう」<sup>九十四</sup>とく「うう」<sup>九十五</sup>とく「うう」<sup>九十六</sup>とく  
 「うう」<sup>九十七</sup>とく「うう」<sup>九十八</sup>とく「うう」<sup>九十九</sup>とく「うう」<sup>百</sup>とく

ままとのひ中す「うう」<sup>一</sup>とく「うう」<sup>二</sup>とく「うう」<sup>三</sup>とく「うう」<sup>四</sup>とく  
 とく「うう」<sup>五</sup>とく「うう」<sup>六</sup>とく「うう」<sup>七</sup>とく「うう」<sup>八</sup>とく  
 「うう」<sup>九</sup>とく「うう」<sup>十</sup>とく「うう」<sup>十一</sup>とく「うう」<sup>十二</sup>とく  
 「うう」<sup>十三</sup>とく「うう」<sup>十四</sup>とく「うう」<sup>十五</sup>とく「うう」<sup>十六</sup>とく  
 「うう」<sup>十七</sup>とく「うう」<sup>十八</sup>とく「うう」<sup>十九</sup>とく「うう」<sup>二十</sup>とく  
 「うう」<sup>二十一</sup>とく「うう」<sup>二十二</sup>とく「うう」<sup>二十三</sup>とく「うう」<sup>二十四</sup>とく  
 「うう」<sup>二十五</sup>とく「うう」<sup>二十六</sup>とく「うう」<sup>二十七</sup>とく「うう」<sup>二十八</sup>とく  
 「うう」<sup>二十九</sup>とく「うう」<sup>三十</sup>とく「うう」<sup>三十一</sup>とく「うう」<sup>三十二</sup>とく  
 「うう」<sup>三十三</sup>とく「うう」<sup>三十四</sup>とく「うう」<sup>三十五</sup>とく「うう」<sup>三十六</sup>とく  
 「うう」<sup>三十七</sup>とく「うう」<sup>三十八</sup>とく「うう」<sup>三十九</sup>とく「うう」<sup>四十</sup>とく  
 「うう」<sup>四十一</sup>とく「うう」<sup>四十二</sup>とく「うう」<sup>四十三</sup>とく「うう」<sup>四十四</sup>とく  
 「うう」<sup>四十五</sup>とく「うう」<sup>四十六</sup>とく「うう」<sup>四十七</sup>とく「うう」<sup>四十八</sup>とく  
 「うう」<sup>四十九</sup>とく「うう」<sup>五十</sup>とく「うう」<sup>五十一</sup>とく「うう」<sup>五十二</sup>とく  
 「うう」<sup>五十三</sup>とく「うう」<sup>五十四</sup>とく「うう」<sup>五十五</sup>とく「うう」<sup>五十六</sup>とく  
 「うう」<sup>五十七</sup>とく「うう」<sup>五十八</sup>とく「うう」<sup>五十九</sup>とく「うう」<sup>六十</sup>とく  
 「うう」<sup>六十一</sup>とく「うう」<sup>六十二</sup>とく「うう」<sup>六十三</sup>とく「うう」<sup>六十四</sup>とく  
 「うう」<sup>六十五</sup>とく「うう」<sup>六十六</sup>とく「うう」<sup>六十七</sup>とく「うう」<sup>六十八</sup>とく  
 「うう」<sup>六十九</sup>とく「うう」<sup>七十</sup>とく「うう」<sup>七十一</sup>とく「うう」<sup>七十二</sup>とく  
 「うう」<sup>七十三</sup>とく「うう」<sup>七十四</sup>とく「うう」<sup>七十五</sup>とく「うう」<sup>七十六</sup>とく  
 「うう」<sup>七十七</sup>とく「うう」<sup>七十八</sup>とく「うう」<sup>七十九</sup>とく「うう」<sup>八十</sup>とく  
 「うう」<sup>八十一</sup>とく「うう」<sup>八十二</sup>とく「うう」<sup>八十三</sup>とく「うう」<sup>八十四</sup>とく  
 「うう」<sup>八十五</sup>とく「うう」<sup>八十六</sup>とく「うう」<sup>八十七</sup>とく「うう」<sup>八十八</sup>とく  
 「うう」<sup>八十九</sup>とく「うう」<sup>九十</sup>とく「うう」<sup>九十一</sup>とく「うう」<sup>九十二</sup>とく  
 「うう」<sup>九十三</sup>とく「うう」<sup>九十四</sup>とく「うう」<sup>九十五</sup>とく「うう」<sup>九十六</sup>とく  
 「うう」<sup>九十七</sup>とく「うう」<sup>九十八</sup>とく「うう」<sup>九十九</sup>とく「うう」<sup>百</sup>とく

さるにさる ことと物とを志す木質をさるさるのうやせう コリヤとてあつてもまひら  
るるあつてはし 志すをくはあつてはし 志すをくはあつてはし 志すをくはあつてはし  
志すをくはあつてはし 志すをくはあつてはし 志すをくはあつてはし 志すをくはあつてはし

しとらすう 函 箱の ぬきまをくめ あつたことさへ  
あ人は惟るく 出うけられどり 志すをくはあつてはし 志すをくはあつてはし  
あつたことさへ 志すをくはあつてはし 志すをくはあつてはし 志すをくはあつてはし  
志すをくはあつてはし 志すをくはあつてはし 志すをくはあつてはし 志すをくはあつてはし

あつたことさへ 志すをくはあつてはし 志すをくはあつてはし 志すをくはあつてはし  
志すをくはあつてはし 志すをくはあつてはし 志すをくはあつてはし 志すをくはあつてはし  
志すをくはあつてはし 志すをくはあつてはし 志すをくはあつてはし 志すをくはあつてはし  
志すをくはあつてはし 志すをくはあつてはし 志すをくはあつてはし 志すをくはあつてはし

松坂 二り

又あめが

こころを

ゆえまぬ

またあめが

のちかちか

と人々

あつとえ

えんせ

あつとえ

あつとえ

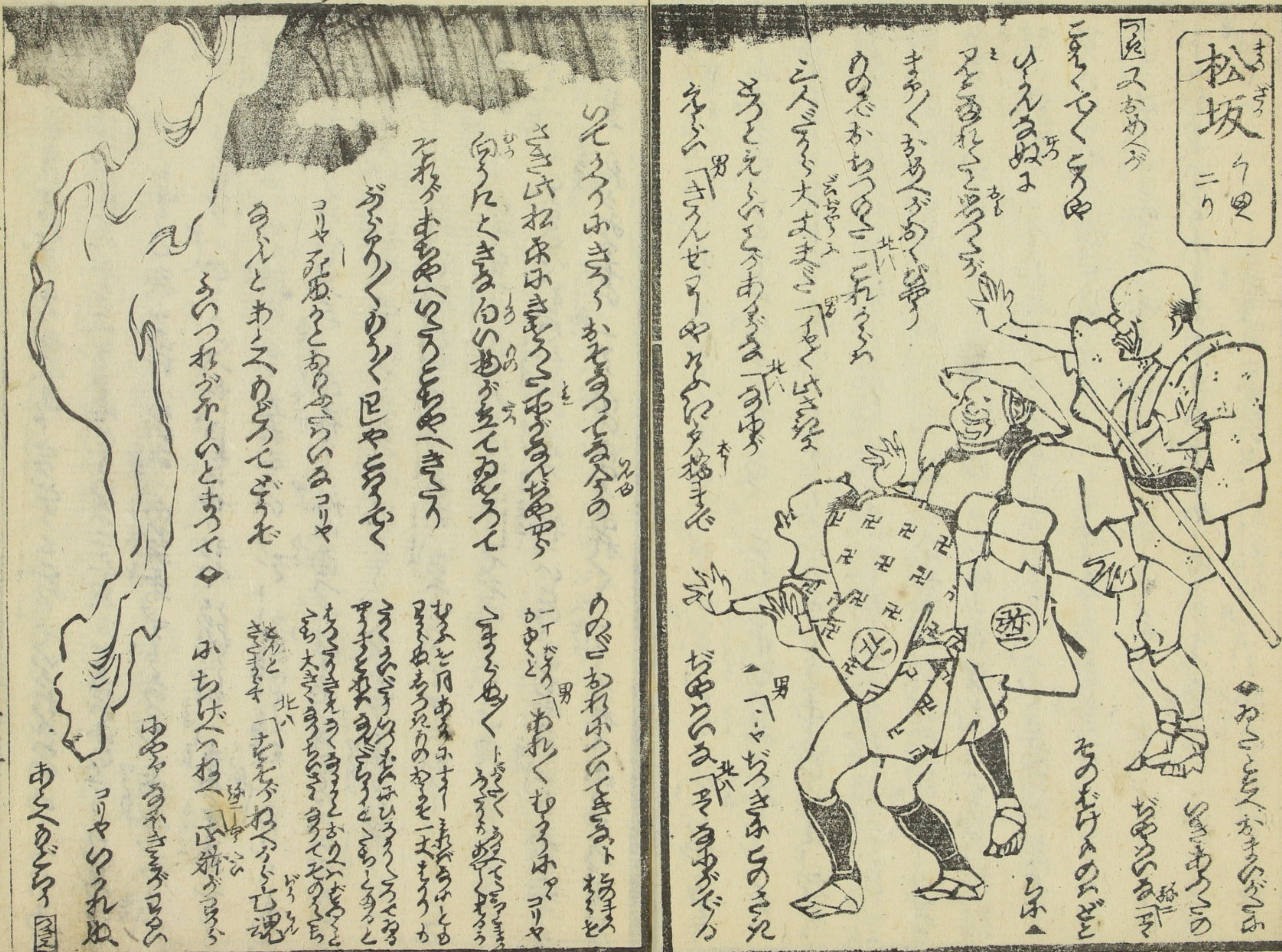
あつとえ

あつとえ

あつとえ

あつとえ

あつとえ



あつとえ

あつとえ

あつとえ

あつとえ

あつとえ

あつとえ

あつとえ

あつとえ

あつとえ

あつとえ

あつとえ

あつとえ

あつとえ

あつとえ

あつとえ

あつとえ

あつとえ

あつとえ

あつとえ



二ノ下

園のつゆをせんと  
けりあつたのり

これより上り  
かまへり

ありあけの  
めえをの  
いそと

あつて  
あつて  
あつて

あつて  
あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて



柿田







あつしてぬえまのちのあふとまふちやまふちのまふちのうらまふちの

まふちのまふちのまふちのまふちのまふちのまふちのまふちの

まふちのまふちのまふちのまふちのまふちのまふちのまふちの

まふちのまふちのまふちのまふちのまふちのまふちのまふちの

まふちのまふちのまふちのまふちのまふちのまふちのまふちの

まふちのまふちのまふちのまふちのまふちのまふちのまふちの

引つれ出板仕

道中滑稽譚三編下之巻終

